昭和54年5月1日発行〈隔月1日刊〉 昭和52年9月30日・国鉄首都特別扱承認雑誌〈第3604号〉

デザイン

5-79
a bi-monthly review of design
no.11
1979 may

特集1

浅葉克己自選新作ポスター集

写真との「ダブルス」からパワーをのせたシャープなスマッシュで現代風俗を切りとり、
デザインの新たな身振りを投射しつづける寵児の新作ポスターをここに結集！

[執筆]糸井重里

特集2

文化状況の変革とエディトリアル——鶴本正三+平野甲賀

マス・カルチュアとの接点で、饒舌な語り口による「意味するもの(シニフィアン)」の絶えざるたわむれに賭ける鶴本。
清新な構成により知性の新しい方向性を具現し、ブックデザインに「我等のスタイル」を確立した平野。無名性に立脚する両者のエディトリアルの原理を探る。

[執筆]草森紳一+篠山紀信+津野海太郎

春光長壽

アメリカ建築素描——アメリカの郊外住宅と二つの美術館[執筆]行富誠一

[海外のグラフィックデザイナー]フランコ・グリニャーニの近作[執筆]フランコ・グリニャーニ

[デザインの新世代⑧]吉本直貴[執筆]デイヴィッド・W・ブリッソン

[中垣信夫連載対談]印刷と印刷の彼岸 第⑦回—写真植字の周辺[ゲスト]石井裕子

WXYinc. HEIKICHI HARATA+MAKOTO OHRUI

海外のグラフィックデザイナー

フランコ・グリニャーニの近作

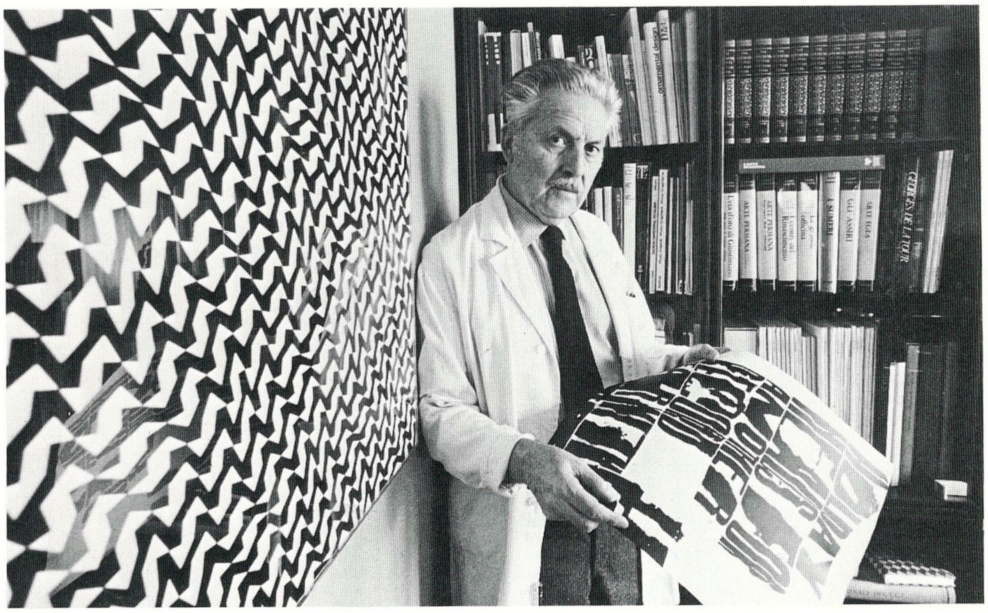
フランコ・グリニャーニ Franco Grignani 略歴

1908年イタリアのパヴィアに生まれる。ほとんど独学で建築を学び，建築家としてスタートしたが，のちグラフィックデザインの仕事に入る。いくつかの大企業のキャンペーン活動に関わるかたわら，科学機器を積極的に導入した新しい視覚的イリュージョン表現を開拓，世界のデザイン界に多大な影響を与え続けてきた。ここに紹介する〈隠された斜線 DN〉シリーズを中心とした新作は，写真や光学を応用したもので，一貫してかわらぬグリニャーニの実験精神を十分にうかがうことができる。グリニャーニいまだ健在なり，である。現在，ミラノ在住。

隠された斜線 Hidden Diagonal

フランコ・グリニャーニ

訳・関修二



信じられないほどの速さで激動してきた文明の発展は，現在，我々の力でコントロールできないほどまでになってきている。このような発展は，まさにこれまで人類が望んできたことであるのだが，まったく予想できなかった結果を生みだし，我々はより限られた，狭いスペースに身を引いて生きて行かざるを得なくなってきている。

これほど文明がまだ発展しなかったころ，我々人間をとりまく環境はすべて開放されていて，自由に関わりがもてるものであった。しかし，現在我々の環境において，加速度的に増加する人口や，多量な情報，社会的なさまざまな規制，文化的な生活を送るために必要な労働，といったものから目をそむけて生活することが出来なくなってきている。

我々は，高速道路においては車線に従って車を走らせ，空を旅するときは飛行機の密室の中で過ごし，家庭にいるときは電話で相手とコミュニケーションをもち，テレビの前に座って時間を過ごす。また，オートメーション化された工場においては，労働者はその工程をただ横で眺めて過ごさざるを得ない。

そしてまた，もし我々がこのような自分に気づき，みずからのバイタリズムで，個人の生活を守っても，幾多の経済的，物理的な圧迫が我々の生活を脅やかすのは，残念ながら目に見えている。そこで私は，人間の頭脳本来の創造性にうったえ，呼びさますためのモチーフとして，視覚的構成体の《有意義な価値コントロール体 Controllo del Valore Significante》を取り上げた。

最近の私の一連の試作品である《隠された斜線 DN＝Hidden Diagonal（伊：Diagonali Nascoste)》は，放射線写真を用いた画面で表現した。したがって非常に細かなミクロ的寸法で構成される。また画面の韻律表現を《総体》の複雑な秩序のある記号表現にゆだねる手法を用いているため，表現方法は限られたアングルや肉眼で見える層の範囲に集中させた。

つまり，これらの作品の内容を理解するためには，小さなものの中から全体をささえている構成を見出し，意味を理解し目をやしなう事が必要である。さらに，いろいろなより高度な問題意識，批判をもつために，画面上のからくりを取り除くこと。即ち，構成上いりくんだ幾何学形態の中のつかまえにくい類似性やグラデーションに小さな違いを分析し，把握すること。そしてその体験により，独自の緻密な分析思考のある批判を蓄えることにある。

例えば，点のいろいろな寸法，移動の表現とか，縞の電光化，濾過，計算され注意深く調整された重層する光と影，緊張感のある釣り合いのとれた斜線状の縞など……画面の実際の意味合いは，これら手法を超えたところにある。

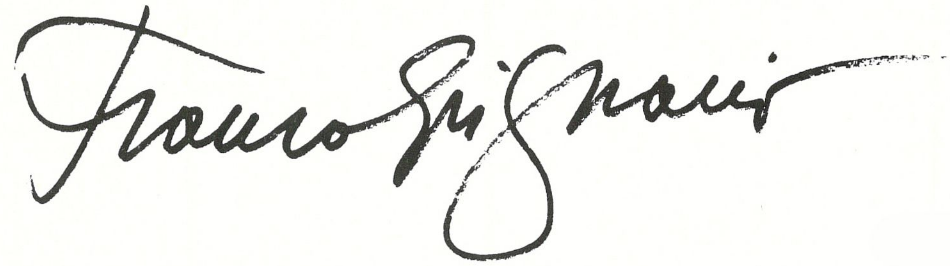
厳密な構成，光あるいは影を注意深く見つめ，表現効果を高めたり，関係づけるものは，画面《総体》の秩序が生みだしている事を探ってみよう。その上で我々は《描かれていないもの》の《実体》より生まれるものがわかる。即ち，その高度な意味合い――我々と作品の道理との間に介在するもの――が《体験としての感銘＝我々の生活空間》である。

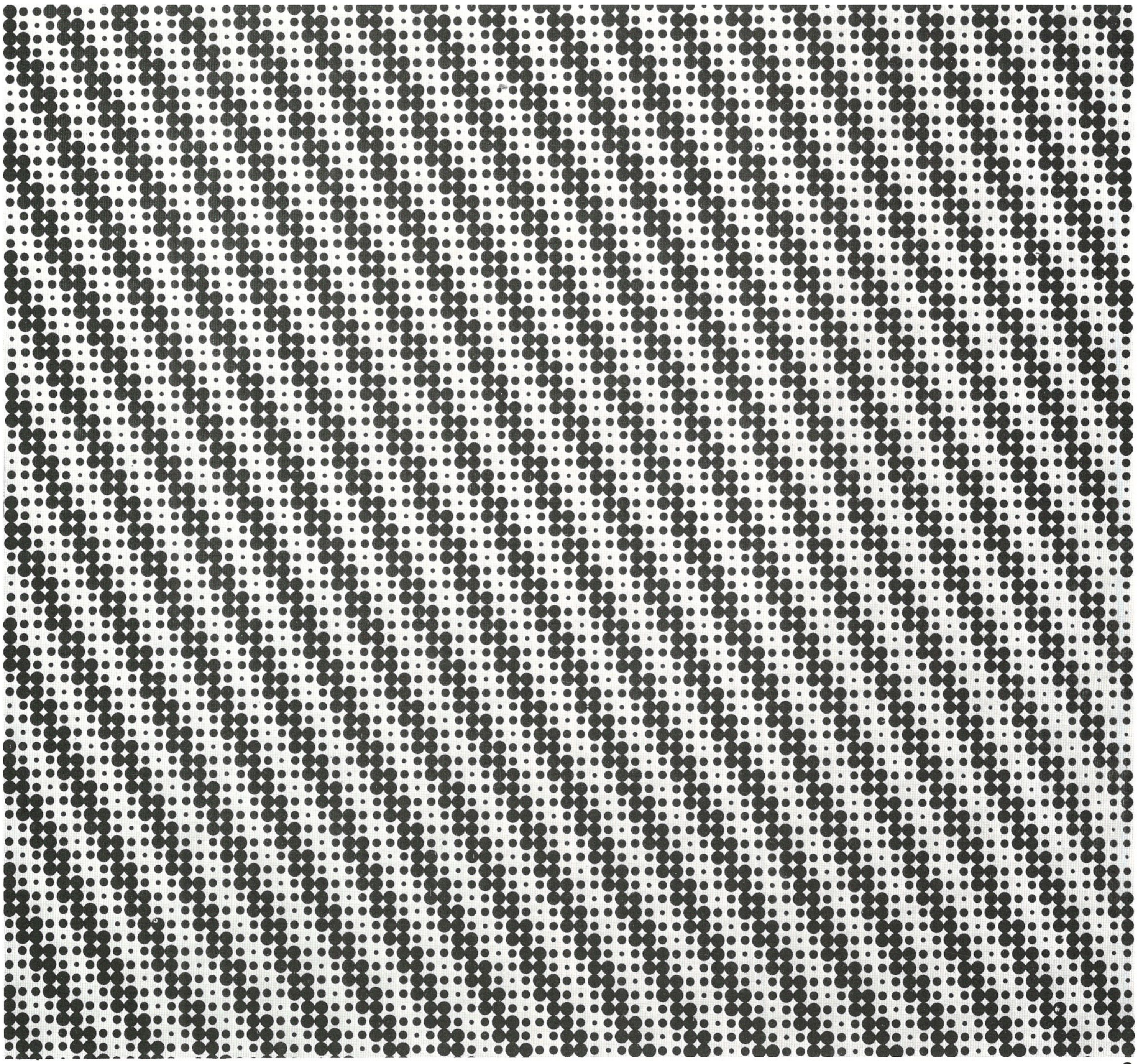
《かくされた斜線》は，画面いっぱいにちらばった記号の構成体であり，継続的に刺激をもち，重要な意味を含んでいる。観察者にとって，このような未知のものを抽出する体験は，確認，批判の際に，独自の見解と豊かな判断力をつちかう。またこの斜線の刺激性は，まことに活発な，動きのとらまえにくい増殖性をもつが，各人の記憶の中で得られる体験としての感銘が教養として整理されるにしたがい，まるで論理学上の構成された組織体として，次第に理解出来る。

このいりくんだ我々の時代において《自由》とは判断することにもある。そしてまた，我々の物質支配や評価を豊かに出来る。即ち，全ての人生は選択であり，より実質的で良識のある経験をたずさえ，物質の多様性と量に魅了されたこの時代で探索に専念することである。

ここに掲載する絵画の中で，《作品 DN 940》は，異なった三つの寸法の6,889個の点で構成された網状の画面である。この多数の点の配置によって強調したいことは，劇的な総体のひろがりの中の，計算され企てられた規律である。しかし視覚的表現の陰には，努力とねばり強いプロ意識と手仕事に要求される厳しさが同時に働いている。なぜならば困難を伴う実験活動の中での美学上の

フランコ・グリニャーニ近影　写真：Pino Montisci





❶

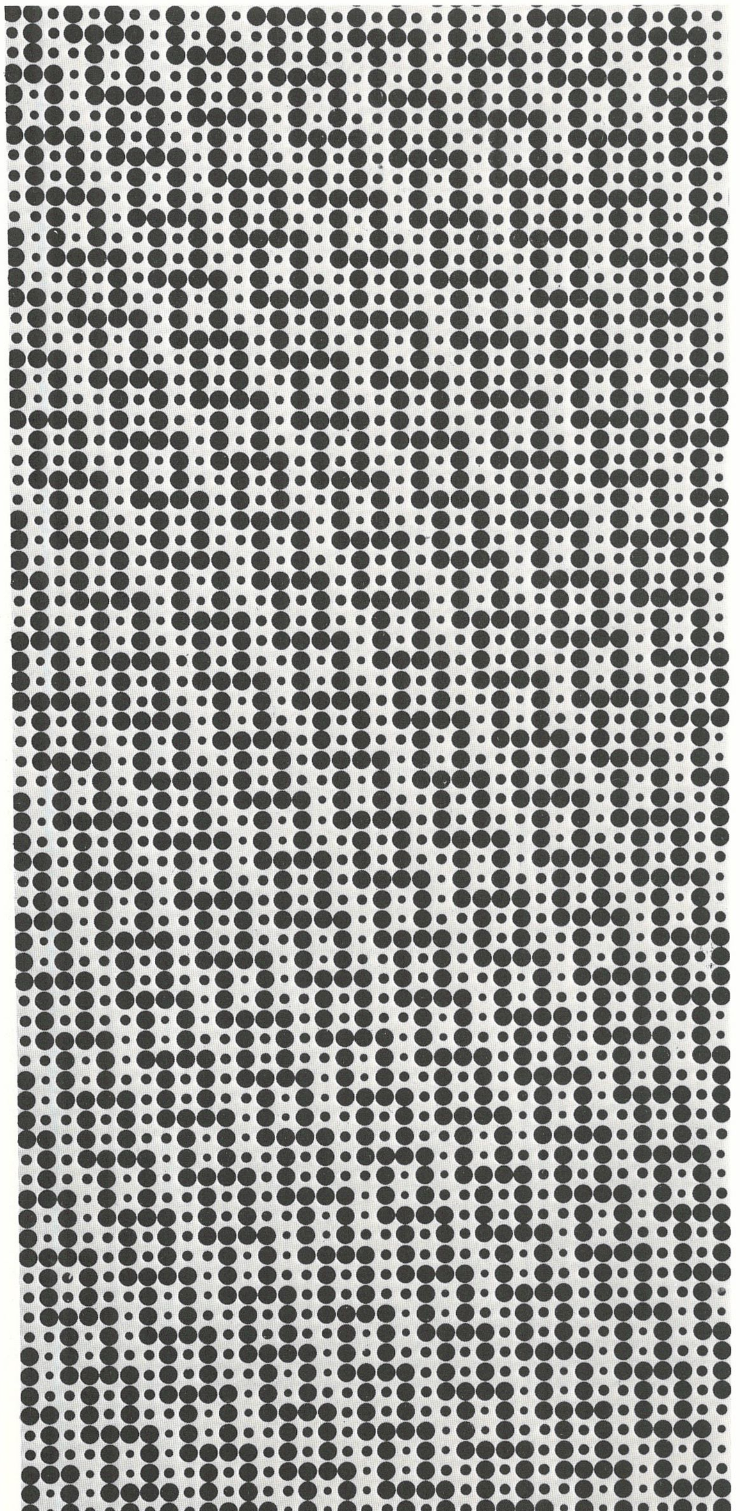
追求は，豊かな技術と仕事の質が必要とされるかからである。

この激動する我々の時代における，私の新しい探究の意義は，かつてG.C.アルガンの述べた「科学の常套的方法の枠を超えるもの」とか，グイド・モンタナの示した「秩序ある表現と計算された刺激の創造性あふれる美学的な機構と，構成の実験における社会的，教育的成果」のようなところにある。

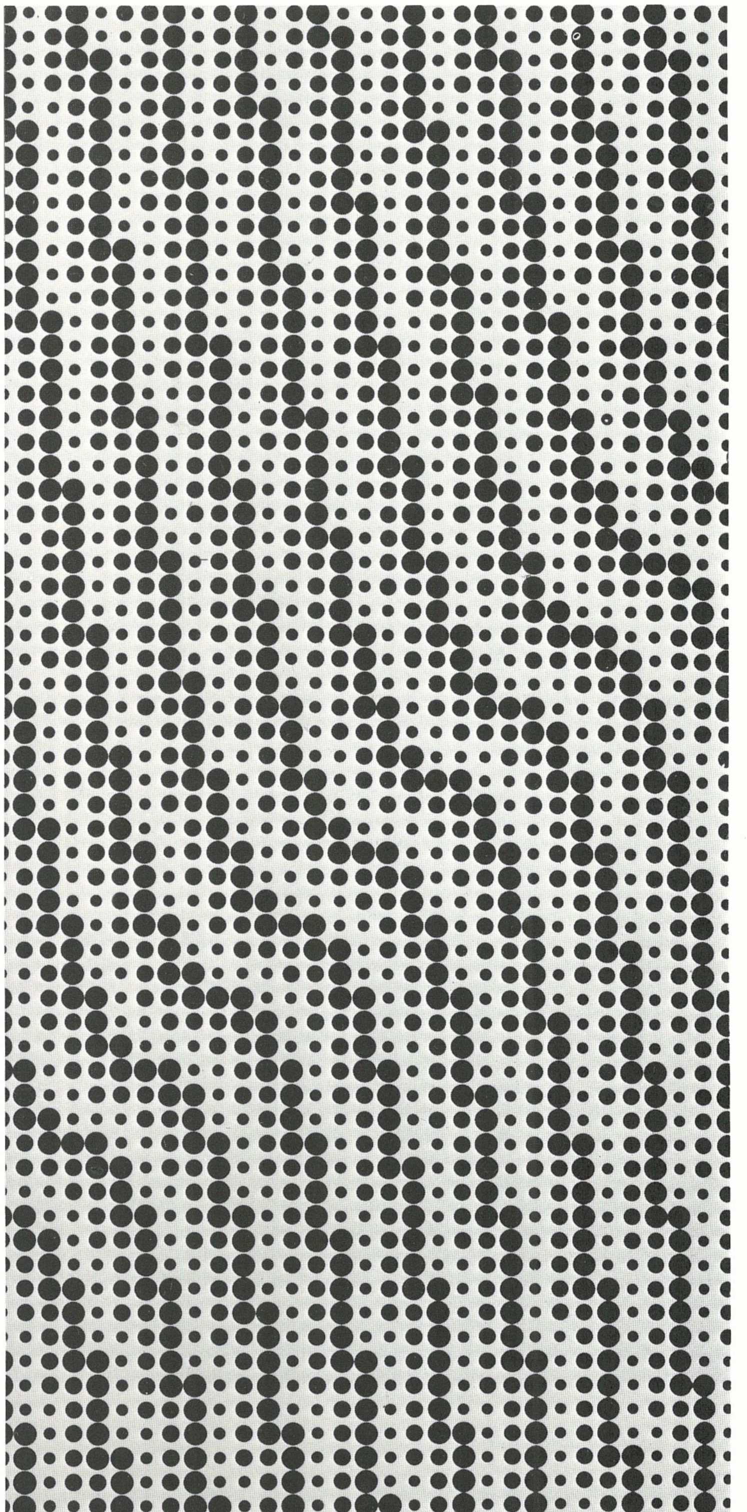
さて，このテーマは学校で興味をもつ若い人々に開かれており，彼らが環境の質を理解するための助力としても，また人間の創造性にうったえる実体を探し出すのに役立つだろう。

<訳者の関修二氏はインダストリアルデザイナー，1971—73イタリア在>

❶—6,889個の点による網状の画面　DN940
100×100cm　1976
(DN＝Diagonali Nascoste 隠された斜線)



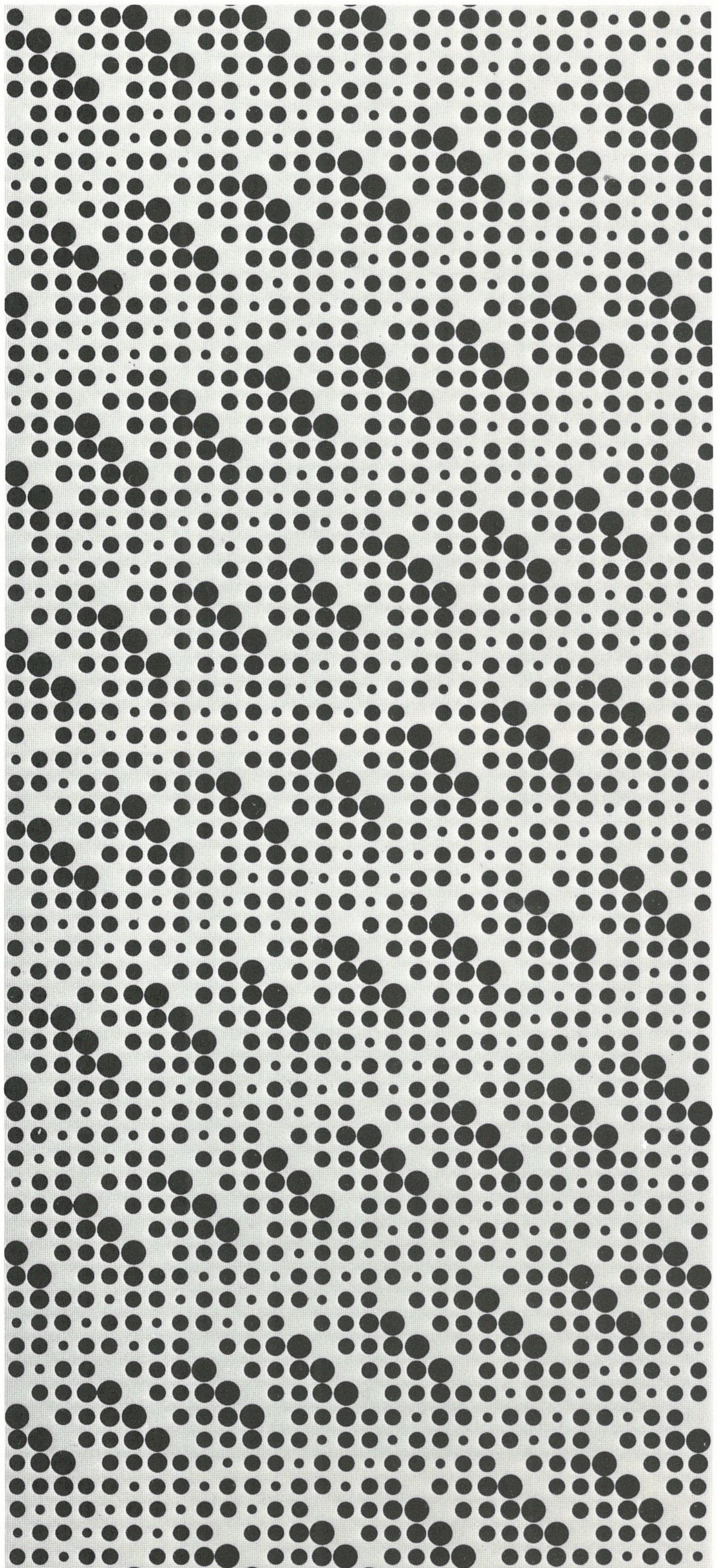
❷



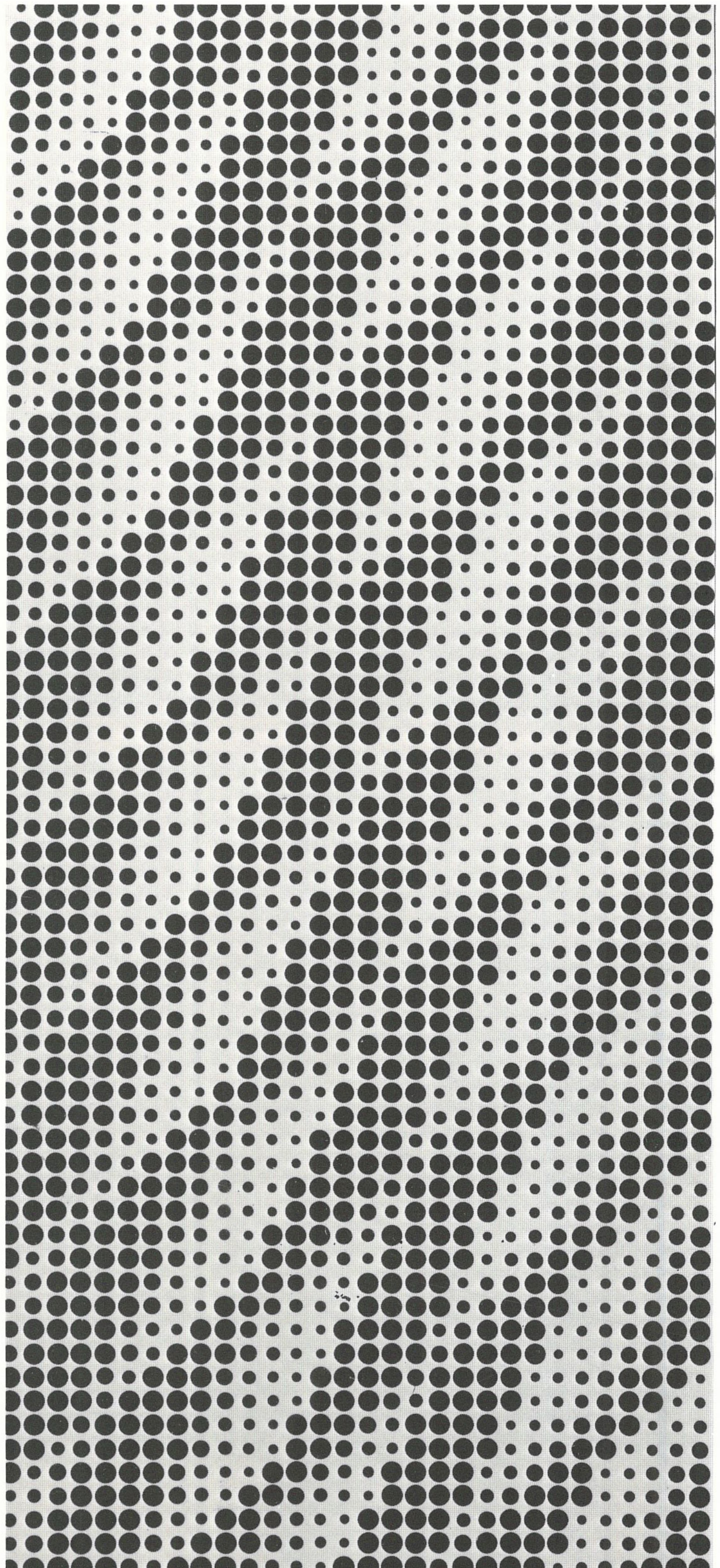
❸

❷—網状の画面　DN919　36×102cm　1975

❸—網状の画面　DN924　36×102cm　1975



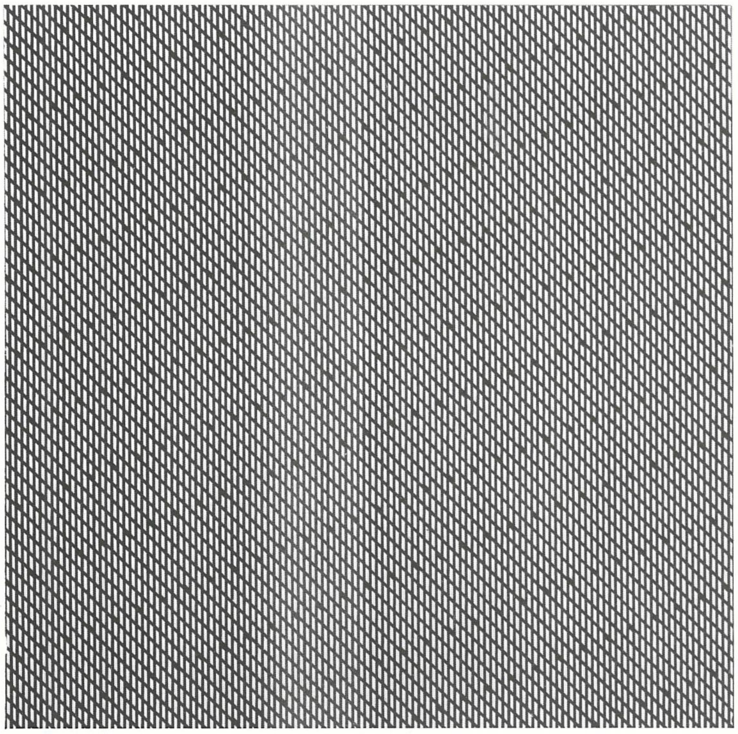
❹



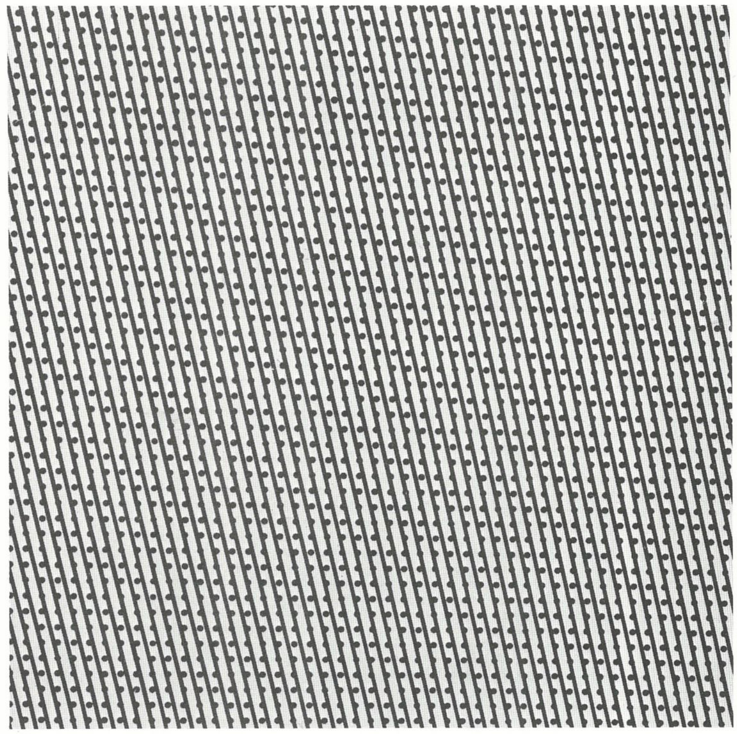
❺

❹—網状の画面　DN925　36×102cm　1975

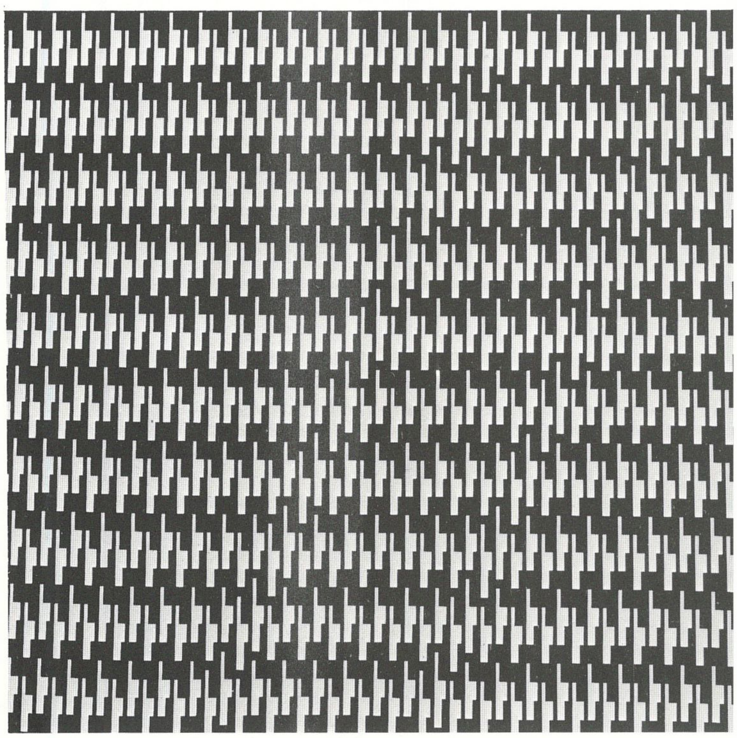
❺—網状の画面　DN927　36×102cm　1975



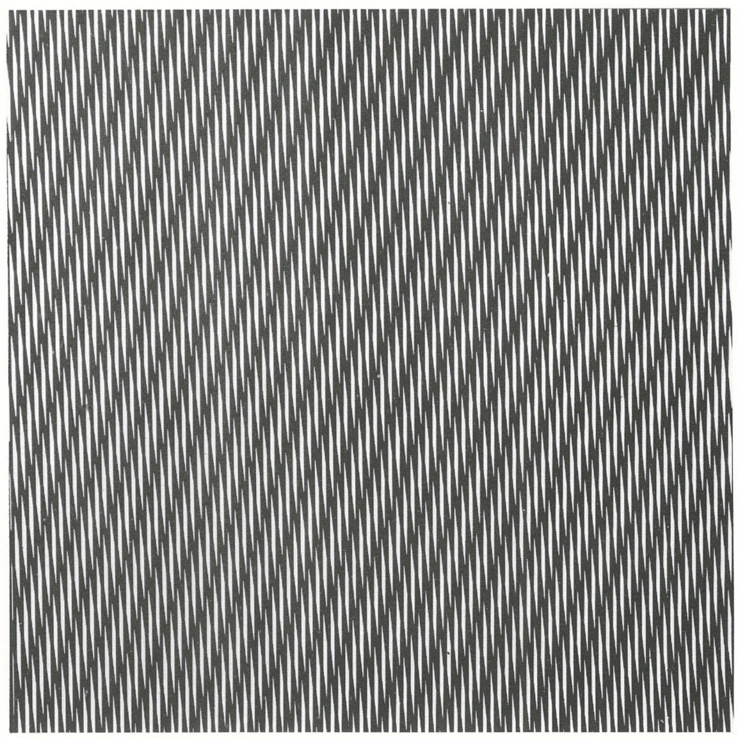
❻



❼

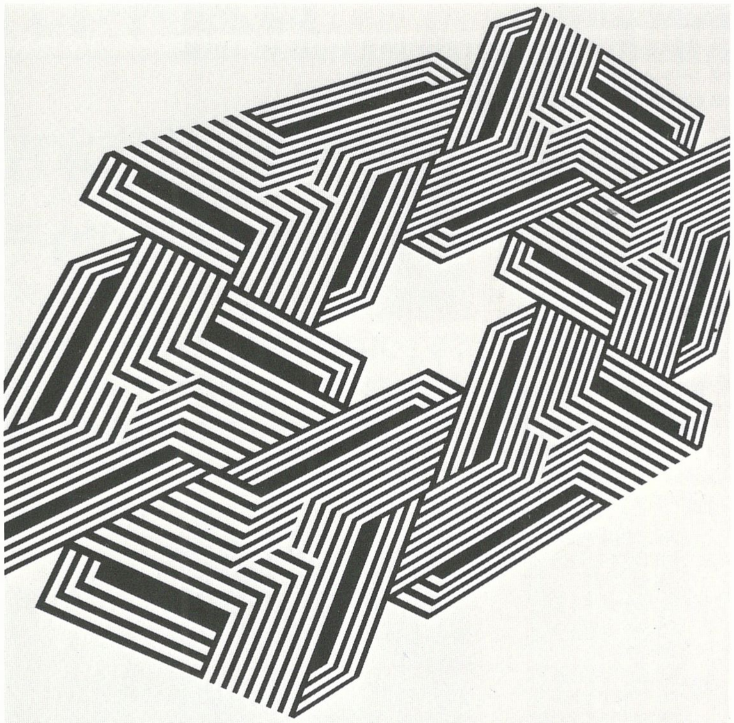


❽

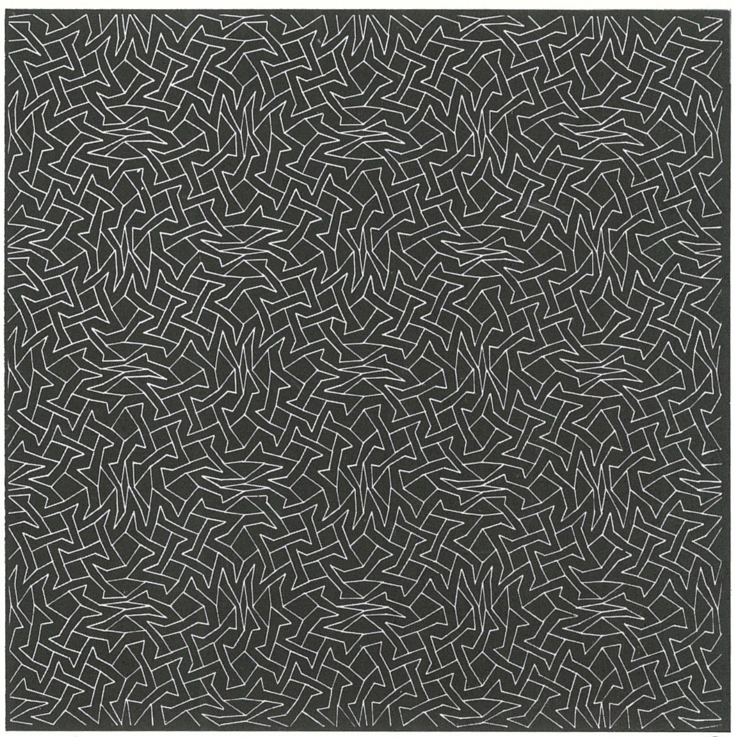


❾

❻—直線の干渉　DN901　73×73cm　1974
❽—階段状の画面　DN917　100×100cm　1975
❼—直線の干渉と網状の画面　DN904　73×73cm　1975
❾—直線の干渉　DN941　100×100cm　1976



⑩



⑪

⑩—線の連鎖による錯視図形　no.592　73×73cm　1973

⑪—数学的なリズムをもって図形が交替する網状空間
73×73cm　1977